

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

移動社会における資源へのアクセス

メタデータ	言語: ja 出版者: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 公開日: 2019-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009398

移動社会における資源へのアクセス

小長谷有紀

国立民族学博物館

(B02 生態資源班)

キーワード：移動社会、資源への接近、資源の不確実性

Keyword : Mobile Society, Accessibility to Resources, Uncertainty of Resources

1. はじめに

狩猟採集民や遊牧民など、それぞれの集団を特徴づけている生業や職業に注目したうえで、さらにその違いを超えて、「移動社会 (Mobile Society)」というようにことさら「移動性」に注目して社会の特徴を捉えることがある。このようにして注目されてきた「移動性 (Mobility)」は、そもそも多様な資源へのアクセスとして実践されていると見ることができる。したがって、移動社会の研究においては、移動に注目することが資源との関係を捉えることに等しく、移動という視点からの研究が蓄積されてきた、と言えよう。

初期には、移動ルートを類型化するといった比較的単純な議論によって、資源の配置とその組み合わせによる利用の展開が考察されてきた。また世界的な定着化の流れのなかでは、移動パターンを定着化のものさしにあてはめる枠組みも大いに流行した。

あえて過度に単純化すれば、移動社会における資源は、定着社会に比べて分散的に存在している。そうした資源に対して移動する人びとはいかにアクセスを確保しているかという観点から注目されてきた諸研究は一種の「領域 (Territory) 論」としてまとめられるであろう[たとえば Dyson-Hudson1978; Casimir1992]。

こうした古典的な移動 (類型) 論や領域論は、移動社会における社会秩序の研究と呼応しており、今日まで連なっている[Salzman2004]。なぜなら、多種多様な資源へのアクセスが広域的かつ一時的に確保されており、あるいは恒常的に住んでいないにもかかわらず確実に確保されているのは、なんらかの社会秩序を反映している、と見なされるからである。

移動社会における社会秩序の研究は論理的に、当該集団内の社会秩序のあり方、移動する当該集団と周辺集団のあいだの社会秩序あるいは軋轢、さらにはそれらをすべて含めた広域的な社会秩序としての国家 (State) 論など、三つの次元に分類することができよう。

本稿では、モンゴル高原を事例にとりあげて、そこでの移動に注目することによって資源へのアクセスについての理解の枠組みを示すとともに、今日的な移動社会を捉える見取り図も示しておきたい。

2. Pastoralism と Nomadism の関係

モンゴル高原でおこなわれてきた牧畜は、移動性が高く、一般に遊牧と呼ばれてきた。しかし、中国内蒙古自治区ではすでに定着化が著しい。一方、モンゴル国では、牧畜以外の目的をもった移動がむしろ際立っている。このように遊牧という生活様式が実態として牧畜と移動性とに分断されており、必ずしも移動と遊牧とが同義ではない今日的な現状を理解するために、まず基本的な概念である Pastoralism と Nomadism という2つのことばについて整理しておこう。

Nomad はそもそもラテン語で牧草を意味するため、語源的には、両者は同義であったと言ってよいだろう。ただし、今日では、両者にそれぞれ意味が振り分けられている。すなわち、Pastoralism はもっぱら家畜とともに暮らして利を得ること（牧畜）を意味し、その範疇に、移動性の低いものから高いものまでが含まれる。一方、Nomadism は、生業として牧畜に限定せず、移動性に焦点が当てられるのである。したがって、後者には旅芸人や養蜂業者など本来、多様な職業が含まれる。

ところが、1950年代から世界の移動民に対して農業による定着化を推進してきたFAOなどの国際機関は、Nomadism について「まったくベースをもたないで浮遊する」という定義を与えている。このような様相は現実世界には実存せず、実存しない様相を Nomadism の定義としているために、Nomadism は指し示す実態がない、という意味で「死語」と化してしまった。

そもそも、Pastoralism が価値中立的であるのに対して、Nomadism には、逸脱、貧困、反抗などのマイナスイメージが付与されてきた。移動民を積極的に評価する「ノマド論」でさえ、その反抗精神を評価しているのであって、結局のところ過去のマイナスイメージを増幅しているにすぎないであろう[D'Almeida 1994]。

現在では、Nomad を研究対象とする研究者さえも Nomadism や Nomad といったことばの使用を自粛しているように思われる。代わって積極的に利用されているのが、Mobile という形容詞である[C.Humphrey 2002 など]。

以上のように、Pastoralism と Nomadism の概念を区別したうえで、これらのことばをもちいてモンゴルの牧畜における移動性について整理しておこう。

モンゴル国の場合、Pastoralism において以下のような様相を見出すことができる。

第一に季節的に宿営地を変えること、第二にその宿営地は複数の候補からそのつど選択されること、第三に宿営地への移動とともに宿営集団が変わること、第四に災害時には恒常的に利用する領域を超えて移動すること。

このように、かなり移動性が高いため、このような Pastoralism に対して Nomadic という形容詞を付して Nomadic Pastoralism と呼ぶことは妥当であろう。

一方、中国内蒙古自治区の場合、20世紀後半から漢族の流入とともに都市化や農耕化がすすみ、さらに1980年代半ば以降になると各地で家畜と放牧地の配分がおこなわれてからは、牧畜そのものの定着化も大いにすすんでいる。居住地の移動性という意味では明らかに Nomadism は認められない。

ただし、他者に配分された放牧地から利用権を入手して自分の家畜を放牧するといった経済活動はとて活発になっている。すなわち、家畜・放牧地・労働力という3つの生産要素を経済活動として

自由に組み合わせることができるようになったので、その意味で社会的移動性は高まっているのである[小長谷 2003]。それは、人びとが空間的に動くという意味での Nomadism ではないものの、Pastoralism における Nomadic な特徴を反映していると思われる。

3. Nomadism から Pastoralism そして再び Nomadism へ

モンゴル・中国の国境を境にした南北地域をふくむモンゴル高原、さらにはユーラシア大陸において歴史的に共通しているのは、遊牧社会が基本的に軍事集団であったという点である。騎馬が世界最速であり、ラクダやウシの積載能力が相対的に優位であった時代、モンゴル人は世界でもっとも強い軍事集団として活躍した。そうした観点から見ると、先の 20 世紀とはモンゴル人にとって、騎馬よりも強力な兵器が次々と開発されたがゆえに、家畜の兵器としての価値が相対的に小さくなり、いわば「家畜の平和利用」が急速にすすんだ時代なのである。歴史的に見れば、家畜という兵器を利用して略奪もおこなってきた軍事集団モンゴル人が、20 世紀になってその平和利用を特化させ、牧畜を産業化させた、と言えよう[Lkhagvasuren2003]。

家畜を武器として利用するという意味も含めて広義の Pastoralism をおこない、略奪などの他の行為も含めて Nomadism を実践してきた集団は、近代化の過程において社会主義を選択する。そのとき、Nomadism はもはや Pastoralism の方法論として縮小された。大きく概括すれば、Nomadism から Pastoralism (=Nomadic Pastoralism) へ、という歴史的な展開としてまとめることができよう。

モンゴル国の場合は、20 世紀の最終期に民主化の過程として、社会主義を放棄し、市場経済化への移行を選択した。それにともない、現在、当該の牧畜および遊牧民は新たな局面を迎えている。第一に、牧畜は国家の主たる産業として省みられなくなっている。第二に、少なくとも遊牧という移動性は旧態依然の稚拙な生産様式であるとみなされている。したがって第三に、遊牧移動する人びとは概して侮蔑され、たとえば現在の首相はインタビューで「せいぜい観光資源としてのみ生き残りうる」と宣告している[Far Eastern Economic Review2001]。

市場経済化にとまなうこのような理解の傾向は、モンゴルにかぎらず、国際的に普遍的な現象であると思われる[Salzman2002:16]。

こうした「Pastoralism の放棄」と呼びうるような政治的・経済的現象とともに、著しく現れているのが新たな移動現象である。Pastoral なき今日の Nomadism については、「新たな遊動 (Neo-Nomadism)」としてまとめることができるように思われる。

4. Pastoralism における資源へのアクセス—その特徴と変容

モンゴル高原における Pastoralism の文脈での資源へのアクセスについて整理しておこう。

Pastoralism にとっての資源として、まず何よりも草と水がしばしば言及される。それらの資源は不確実に分布しているという特徴をもっている。移動社会の例にもれず、乾燥したモンゴル高原でも、自然資源の分布は空間的かつ時間的に不確実である。そのために、社会集団の方が移動することによ

って資源へのアクセサビリティが高まる。換言すれば、移動は、土地の高度利用の手段なのである。

モンゴル国の場合は、今日でも、毎年異なる資源の不確実な分布状況に応じて具体的な移動が決定される。

今日では、学校、病院、商店など固定的な施設や、それらの施設へのアクセスを決定する道路なども、遊牧民にとって宿営地の選択を決める大きな要因になっている。その意味では、これらのハード・インフラもすべて資源とみなすことができるであろう。草や水が自然資源であるのに対して、これらの施設は社会資源とでも呼んでおこう。

市場経済化への移行によって市場までの距離が変数として意味をもつようになったモンゴル国の場合、現在では、自然資源へのアクセスよりもむしろ社会資源へのアクセスがより重要な意味をもつようになってきた。逆言すれば、社会資源へのアクセスが優先されるあまり、自然資源へのアクセスが考慮されないために、自然資源の有効な利用が図れなくなっているという問題が発生しつつある。

一方、中国内蒙古自治区のように放牧地の利用権が確定されている場合は、自然資源の変動に対応するためには、飼料作物の購入など移動以外の手段を確保しなければならない。たとえば、水場へ家畜を移動する代わりに、水を購入して運搬するという方法に転換しつつある。このような資源への新しいアクセス方法は、家畜の移動に比べて膨大なコストを要する。したがって、牧畜業を将来的に維持すること自体がきわめて困難になりつつある。資源へのアクセスそのものであった移動が消滅すると、資源へのアクセスはすべて換金経済によって実現されるという市場メカニズムに巻き込まれている。

5. Neo-Nomadism における資源へのアクセス

モンゴル国では、現在、多くの遊牧民たちが遊牧を放棄して首都ウランバートルに流入している。一方、もとより首都にすむ市民たちはモンゴル国を立ち去り、世界中の居住可能地へ流出する。とりわけ後者の移動は 21 世紀に顕著になった活動として注目されよう。

現在では、親戚が韓国にいない人はいないと言われており、国民のおよそ 2% が海外へ出ているものと推測される。もともと人口が少なく、余剰労働力があるわけではないので、流出は中国などからの労働力移入によって穴埋めされている。

こうした現状に関して、国際機関などの援助側は、国内産業の育成が図れないことを憂えて海外移民に関する調査を発注するものの、当のモンゴル国政府は依然として各援助国に対して移民の受け入れを強く要請しつづけている。

移民の正式な受け入れの有無に関わらず、1 件数千ドルの高額で外国へのビザを発行する広告があふれており、「出国支援ビジネス」として成立している。正規の留学制度のほかに、たとえば海外で開催される各種の国際的な会議をネット上で検索し、その主催者に渡航を申請し、ビザを取得するというシステムもあると思われる。このビザこそは、海外で居住する無限の可能性を秘めた資源への具体的なアクセス・ツールにほかならない。

海外に出たモンゴル人が得意とする分野は、たとえばインド人の工学分野やパキスタン人の中古車

ディーラーのように明確ではない。いまかりに、世界中のおよそ 10 万人のモンゴル人から、月額 300 ドルが送金されていると仮定すると、年間 30 百万ドルの送金総額となる。

Pastoralism を放棄してなお顕著な Nomadism 現象としての Neo-Nomadism は、こうしてモンゴル国をも扶養する重要な経済セクターに成長しているのである。

中国内蒙古自治区のモンゴル族は、モンゴル国の事例ほどあからさまに移動をすることが許されていない。それでもやはり移動現象は顕著である。社会主義の大義名分を維持しながら、市場経済下でより有利な雇用機会を求めて人びとは移動せざるを得ない。

定着化の中でなお牧畜業にたずさわって牧民たちのあいだでは、次世代のすべてが親の生業をつぐことはできない。2～3 人の子どもたちのうちのせいぜい 1 人が牧畜業のために地元に残る。その他は勉学にはげみ、漢語を習得し、内蒙古自治区の首府フフホトで高等教育の機会をもとめて移動する。そうして移動してきた人びとのなかには、さらに留学のチャンスを見つけて国外へ流出する人も少なくない。ひとたび留学すると、就職の機会を見つけて永住することをめざすのが一般的である。

このような国内移動と海外移動の 2 段階移動は、モンゴル国と構造的に同じように見えるかもしれない。しかし、モンゴル国の場合は、前者の国内移動と後者の海外移動では主役を異にしている。すなわち、遊牧民およびその子弟にとっては、国内移動の段階で最下層に位置することとなり、その先の海外移住の機会が彼らにとって無いに等しい。一方、内蒙古自治区における子弟は最初の移動で必ずしも最下層に落ち込まないので、留学の機会は残されている。

こうした構造的な差が認められるものの、いずれにせよ、Neo-Nomadism 現象が確認される。今日、グローバルに観察されるトランスナショナルな動きとまったく同一の現象として理解してよいのか、それとも、Nomadism として区別すべき様態が存在しているのか、今後の課題として重要であると思われる。

6. さいごに

本稿では、モンゴル高原を対象に、モンゴル国と中国内蒙古自治区を比較しながら、移動社会における資源へのアクセスがどのような特徴を持ちながら変貌しているかという概括を試みた。その際、Pastoralism と Nomadism という概念の区分を整理に援用している。

大きな歴史的変化として、過去に Nomadism から Pastoralism へという比重の移動が生じ、現在ではふたたび、Pastoralism からむしろ Nomadism へという移動が見受けられるという枠組みを提示した。また、現在の Pastoralism および Nomadism のそれぞれの文脈において資源へのアクセスの社会的変異についても見取り図を示しておいた。

本来ならば、遊牧の維持可能性という Pastoralism における Nomadism の問題と、海外送金という Transnational な問題はまったく異なる次元であり、その文化的連続性を考察することはできないにちがいない。それらを同時に語るができるところに、「資源人類学」という切り口の生産的な意味があるように思われる。

参考文献

Casimir M.J. and Aparna Rao eds.

1992 *Mobility and Territoriality* BERG

Dyson-Hudson R. and E.A.Smith

1978 Human Territoriality: An Ecological Reassessment. *AA*, 80(1): 21-41

Lkhagvasuren I. ed.

2003 *The Twentieth Century in Mongolia; Interviews About the Way to Socialism* (in Mongolian)
SER 42

Murphy D. 2001 No Room for Nomads. *Far Eastern Economic Review*, May: 30-32

Salzman P.C. 2004 *Pastoralists; Equality, Hierarchy, and the State*

小長谷有紀

2003 「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の季節移動の変遷」塚田誠之編著『民族の移動と文化の動態』風響社 pp.69-106

ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ

1994 『千のプラトー』河出書房新社